

異界の魔法少女

【時己之千龍】 龍時

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

その日も任務を無事に終えて帰還となる筈だった。

何処で間違えてしまったのだろうか……。

任務の内容は、とある遺跡の古代遺失物の封印を目的としていた。

封印処理には精神力による封印と魔力を魔力化して行う封印の二通りがあり、今回はよく使われている後者を用いた封印処理で行われた。しかしそれは判断ミスだった。その魔力を食らって遺失物が暴走を起こしてしまったのだ。

暴走する遺失物の強さはひどく、唯一の出入り口が崩れてしまい、逃げ道を失った俺達は……何も出来ずただ見ていることしか出来なかった。次第にその暴走は空間を裂

き、特務機動隊を飲み込んだ。

目次

第1章 未知なる力

第01話 金髪の少女 | 1

第02話 一枚の名文 | 12

第03話 リニスとの別れ | 21

第04話 拠点は必要不可欠 | 29

第05話 発見 | 41

第06話 次元震 | 47

第07話 管理局 | 55

第08話 決意、そして会談 | 62

第09話 決戦 | 70

第10話 最終決戦、と…… | 77

第11話 星と月に願いを込めて

第2章 九天の書 88

第01話 目覚めた場所 | 93

第02話 Dブロック予選第1試合

102

第03話 Dブロック予選決勝試合

109

第1章 未知なる力

第01話 金髪の少女

SIDE 灼煉院シヤクレンイン 龍燕シエン

気づくと俺は、寝台で寝ていた。渦に入ってしまったから一体どのくらい経ったのだろうか。みなは大丈夫だろうか？等を考えたが、今のこの状況……俺は助けられたのだろうかと思ったとき、扉が開いた。開けたのは金髪の少女だった。

「あ、目が覚めたんですか？」

「え、ああ。君は？」

金髪の少女はよかったと小さく呟きながら入ってきた。

「私はフェイト・テストアロツサつて言います」

「俺は灼煉院シヤクレンイン 龍燕シエンだ。ここは……」

「ここは「どうしました？」あ、リニス」

もう一人、リニスという女性が現れた。龍燕はすぐに気配で人と違うことに気づく。「目が覚めたみたいですね？私はリニスといいます。貴方が庭で倒れていたのをフェイトが見つけて、私がベッドに寝かせたのですが……」

「助けてくれたのか？ありがとうございます」

俺が礼を言うと、リニスは近づいて言った。

「聞きたい事があるのですが……いいですか？」

「聞きたい事？ああ」

警戒をしていると俺は気づくが、まあ仕方ないことだと思う。

「貴方は管理局の方ですか？」

「管理局？」

初めて聞く言葉に俺は顔を変えた。

管理局……この国にある組織かなにかか、と龍燕は思った。

「……違う、というより俺はその組織を知らない」

「そうですか。ではもう一つ。貴方はどの世界から来たんですか？」

「どの世界？」

俺は悩んだ。よく解らなかつたが恐らく、国の事を世界と呼んでいるんじゃないかと思つた。

「……多分貴女の知らない世界だ」

「知らない世界？」

「俺は仲間達と任務をしている際に、事故に遭い、目が覚めたらここにいた」

「そう、ですか。貴方は行く宛てはありますか？」

「正直ここまでの道程もわからない。だからその逆、帰る事も難しい。もしできたらずの間にここに居させてもらえないか」

「えっ」

「少しの間でいい。頼む」

俺は頭を下げて言った。

「リニス…」

フェイトもリニスの後ろで心配そうに呟いていた。

「貴方は何か出来ますか？」

「俺に出来る事……か。料理と…戦いくらいかな」

そう答えるとリニスは腕を組み、右手を顎に置いた。

「戦い、ですか？教えるのは得意ですか？」

「俺は戦闘技術教導官の資格を持っていた」

「そうですか……なら」

リニスは何か思い着いたようだった。

「ではどれほどの力があるか、フェイトと模擬戦をしてみてください」

「なに？」「え？」

俺とフェイトは同時に驚き、言葉を漏らす。

「合格したらフェイトの戦技教導官として置いて差し上げます。では移動しましょう」
俺はリニスについて行った。

S I D E O U T

移動し着いた場所はいつもフェイトが戦いや技の練習をしているという場所だった。
「ではここでお願いします」

「…決まり事は？」

「ルールは相手を気絶させるか、ギブアップさせたなら勝ちです」

「了解した」

「バルディツシュ、セットアップ」

「セットアップ」

フェイトはセットアップした。

「それは？」

「この子はバルディツシュ」

「そうか。こいつらは俺の武己レンソウキョウの煉双曉だ」

左右に着けた籠手コテからそれぞれ炎が溢れ出し、それぞれ人の形になると、周りの炎だけがバサッと桜の花弁のように舞い散らし、地に着く前に消えた。内だった人の形は龍燕に似た少女で、身長は140ほど。顔は龍燕に似ているところもあり、また二人は双子だ。

「はじめまして。私は暁アカツキ。よろしく」

「…はじめまして煉レンです。よろしく」

「えつとよろしく?」

「ひ、人になった?」

リニスとフェイトは驚いていた。

「君のは実体化しないのか?」

「…しません」

「えつと…模擬戦を…、この子達も参加するんですか?」

「いや見学だ」

「そうですか。では貴方もバリアジャケットに…」

「バリアジャケット、というのはない。だが武装兵装ブツウヘイツウというのはある。武装兵装、装着」

両手の籠手から桜の花弁に似た紅の炎が溢れ、龍燕の身体を包み込み、紅色を基調とした鎧を形成した。

「武装兵装、ですか。わかりました。では始めますので距離を取って構えてください」
「了解」

フェイトと距離を取った。

「では始めますよ？レディ：：ゴォー！」

先に動いたのはフェイトだった。フェイトは黄色い銃撃のようなものを数発飛ばし、その後ろを追うようにしながら龍燕に接近していく。

龍燕はその銃撃に興味をひかれた。飛ばしてきたのはビーム、レーザーといったものではないと見てすぐにわかる。銃撃を手の甲で打ち突く、眞炎流コダという格闘技で、叩き落としていった。するとフェイトは結構な速さで龍燕の懐に入り込み、戦斧を鎌に変え、斬り上げた。

「はっ！」

龍燕は黄色い刃を右の人差し指と中指で挟み止めニヤリと兜の内ですわった。そして少しばかり力を込めて容易く折った。

「なっ」

驚きの表情を出したフェイトは一旦後ろへはねて距離を取り、折られた刃を生成し直して体勢を立て直す。

「武装兵装、解除」

武装兵装を突然解除した龍燕にフェイトとリニスが驚きの声を漏らす。

「あの…何故？」

「武装兵装だと差があり過ぎるからだ。それに力加減がほとんど自動だから難しい。俺は本来、鎧を纏わずに生身で戦う」

そう言つて龍燕は左半身を前にした構えをとる。

「さあ続きをしようか」

龍燕はわくわくとさせながら笑う。

「えっと…」

フェイトは不安そうな顔でリニスを見る。リニスも不安そうな顔だったがフェイトに頷いて返す。それを見たフェイトは視線を向き直した。

「わかりました。行きます」

「ああ」

フェイトは構え直す。

「フォトンランサー…」

フェイトの回りに砲台が三つ生成させ、龍燕を狙う。一方龍燕は構えを崩さず炎を身体に纏わせた。身体強化系腕力強化の技だ。

「ファイアッ！」

バルディツシユを龍燕に向け振り下ろし、さっきの銃撃……ランサーが龍燕に目掛けて放たれた。

「マエンリユウ眞炎流、炎球・三撃」

龍燕も炎球を三つ生成し、それはランサーとすれ違いまっすぐフェイトへ向かう。龍燕は固打でランサーを破壊し、フェイトは炎球を鎌で斬り裂く。

「アークセイバーッ！」

声とともに鎌の黄色い刃が切り離され、弧を描いて回り、龍燕に向け飛んでいく。龍燕は右腕に炎を絡めた。

「ジュツシキソウテンギ術式装填技、ゴウワンケンセイ轟腕拳正ッ！」

腕を振るい、炎がその勢いで放たれ、アークセイバーに当たり爆発した。

「…なかなか、だな」

爆発の煙りが晴れ、息が上がりかけているフェイトの姿を見ながら龍燕が言う。

「貴方の方が凄いです」

フェイトも龍燕を見て言うが、少し…いや、かなり驚いていた。『自分の息が上がっているに龍燕の方は上がっていない』ということにだ。

「体力の差か。なら次で決めるか?」

フェイトはチラリとリニスの方を見た。リニスは何か目で合図しているのが見え、龍

燕は何か来るなど思い動こうとした。しかし動かない。両手足に違和感を感じ見てやると黄色い輪にしつかりと留められていた。

「拘束か…」

龍燕は視線を戻しフェイトを見ると、最初の砲台をかなり増やしていた。

「行きます！」

フェイトは何か呪文を唱え始めた。

「ほう…大技か」

辺りに電流が走った。龍燕は少し手足に力を込めれば簡単に輪を砕くことはできたがあえてまだやらなかった。

「フォトンランサー、ファラックスシフト！」

数機の砲台がさらに増えていく。

龍燕は面白そうだとまたニヤリと笑ってしまった。ここで拘束を難無く破壊して、フェイトを見た。

「どれほどの力か…来い！」

「ファイアー！」

何十発ものランサーが放たれた。龍燕は深呼吸を一度やって、次々と素手で打ち落とした。

やがてランサーが止んだ。龍燕の周囲に煙りが立ち込める。
「凄いな」

煙りの中で龍燕がそう呟く。煙が晴れ、胴着や羽織にも傷、汚れすらない龍燕の姿が見えた時フェイトは一言「降参」と言った。

それを聞いた龍燕はそうかと返し、リニスの方へ戻った。

「どうだ？」

戻った龍燕はすぐに聞いてみる。リニスは驚いた顔を浮かべている。

「えーと…まず、貴方は人間ですか？」

「何？」

リニスのいきなりの妙な発言に龍燕も驚く。

「いえ…なんでもありません。合格です」

妙な発言に驚いた龍燕だが合格を貰ってよかったとほっとする。

「有難う。それにしてもフェイト」

龍燕は戻ってきたフェイトの方へ振り返る。

「強いな」

「…龍燕に比べればとても…弱いです……」

「いや、フェイトは素質もあるし、もっと強くなると俺は思うぞ」

俺はフェイトの頭を撫でながら言った。

「えと、あのその……」

顔を赤らめながら下を向いた

「それに銃撃にも驚いた。アレは魔力だったが、魔力にあんな使い方があったのは知らなかった。俺のいた世界では魔力を使つての戦闘は刀や剣用の属性付与用ぐらいだ」

「そうなんですか。私は炎を纏つたり、放つたりしていたのに魔力を感じなかったのに驚きました」

お互いに驚いた事を言い合う。それからリニスと少し話し、龍燕はいくつか使える技を披露したり、精神力の操作を使えるようになればフェイトにも使える技を見せた。一通り見せた後は屋敷に戻り、今後の話をした。

第02話 一枚の名文

龍燕シエンが世話になって一ヶ月以上が過ぎた。

今はフェイトの訓練を見ている。今やっているのは龍燕シエンの武己ブキ、暁アカツキと模擬戦をさせている。暁アカツキは重力慣性能力を使う。その能力でよくフェイトのランサーを止めたり消したりしていたが、最近はフェイトのランサーもかなり向上し、重力の圧気にランサーが耐えたり、重力壁を突破するようにもなってきた。

最初に比べフェイトの動きに無駄が少なくなり、技のキレやスピード、威力等もよくなった。それから龍燕シエンがよく教導時にやっていた体力向上法も加えたため、体力面もいい感じだ。

「うん。かなりよかったぞ。体勢の直しも早くなっていた」

「ありがとう」

「もう少しで私に追いつくかな?」

龍燕シエンの武己ブキである暁アカツキが言った。暁アカツキは強さに追いつかれて悔しいというのは感じていない。むしろ成長するフェイトに喜んでいた。

「そうだな」

最近は模擬戦が多くなって来た。技の完成度が高くなったため、次の課題として実戦だ。実戦はその時々判断や咄嗟に技を出すなど必要になる。練習では多少長く考えても問題ないが、実戦になれば思考の早さも必要となる。模擬戦の相手には今回のように^{アカツキ}暁を出している。どちらも接近戦闘、中距離戦闘と戦闘スタイルが同じ。煉の方^シは後方支援がメインとしているためあまりない。しかしもうそろそろ違う戦闘スタイルを相手に模擬戦をさせ始めても良い頃かなと^{シエン}龍燕は考え始めていた。

また戦いに二手、三手と先を読めるように^{シエン}龍燕は将棋を教えてみた。フェイトは頭もいいためすぐにそれを覚えた。リニスも面白そうですねと一緒に行うようになった。

身体を休めながら今回の模擬戦を映像で流し、良いところや改善点などを^{シエン}龍燕がフェイトに話していた時、リニスが声を掛けてきた。

「お疲れ様です。そろそろ休憩にしませんか？」

「そうだな。フェイト、^{アカツキ}暁、休憩にしよう」

「うん」

「はい」

^{シエン}龍燕達は食堂に移動する。

「今日の、何かかな？」

休憩時にはいつもお菓子が出ている。それでフェイトが今日のは何かと聞く。

「今日はクッキーを焼いたの」

「クッキー？」

「アカツキ 暁は知らない単語で首を傾げた。

「クッキーってなーに？」

「とても美味しいものですよ」

「リニスアカツキが笑顔でそう言うアカツキと暁はそうなの？と楽しみといった感じに笑う。それからふと暁は思ったことを口にする。

「レン 煉は？」

「レン 煉は暁と同じ姉妹で、一つの武ブ己キだが個としては完全に分かれているため記憶も同様

だ。

「レン 煉なら先にいますよ。クッキーを作るのを手伝ってもらいました」

「レン ほう楽しみだ」

「シエン 龍燕の知る限り、レン 煉はまだ料理した事はない。それだけ楽しみだった。

食堂に入ると先にレン 煉とアルフは座っていた。シエン 龍燕達も席に着いた。そしてクッキーといった、いろいろな形をしたものを見た。また香りもとてもよく鼻がそれにひかれた。

「いい香りだ」

「どうぞ召し上がれ」

席についた龍燕シエンは一つのクッキーを取った。その表面には見覚えのある絵が描いてあった。

「煉レン。これは煉レンが描いたのか？」

表面に描いたもの。それは眞羅暁帝シラギヨウテイオウミコウ王国の国旗だった。皿をよくみると他にもたくさんあった。

煉レンはうつすらと頬を赤く染めながら龍燕シエンの問いに頷く。

「よく出来ているな」

「…ありがとう」

クッキーを口に入れた。少し甘いが美味しい。始めての味だった。そして紅茶というお茶を飲んだ。うんと頷き、クッキーという茶菓子と紅茶はよく合うと龍燕シエンは思った。

こういうお茶をする事は少なかった。以前は任務に行くか事務をするか、また教導に行くかだったため忙しかったからだ。だから平和ボケしそうなくらい今は楽しい時間だ。

そう思っているとフェイスが口を開いた。

「ねえリニス」

「なんですか？」

「このクツキー。お母さんにも…持って行ってあげたらダメかな」

「…ああ…」

リニスは少し困った顔を見せた。フェイトの母親は研究をずっと続けていて部屋から出てこない。龍燕もここに来て一ヶ月を過ぎるが二回程度しか姿を見てはいない。食事ですら部屋でとっているためフェイトですら三日に一回、言葉もなくすれ違いに姿を見るくらいあるかなと寂しそうに言っていた。

「わかりました、あとで私が届けてきましょう。プレシアも研究が忙しいですから…」

「うん…そうだよね。ごめんねリニス」

一気にフェイトの顔が暗くなつた。

「ああ…いえ……」

言葉に困るリニスを見て、龍燕は口を開いた。

「フェイトは悪くないだろう？それに、たまには何らかの息抜きをしないと何をしようにも出来る前に身体が持たないからな」

「そうです。謝らないでいいんです」

「うん…」

SIDE リニス

休憩が終わってフェイト達が訓練に戻り、私はプレシアにお茶を届けに行った。

「プレシア。お茶をお持ちしましたよ」

「入りなさい」

私は扉を開け、部屋に入った。

「失礼します」

「そこに置いておいて」

プレシアはいつものように、振り返りもせずにつてくる。

私「はい。今日はクッキーがあるんですが…」と言うが「要らないわ」と即答されてしまう。

「まあそう言わずに…。美味しいクッキーですからあなたにも食べてほしいとフェイトが」

「余計な気は遣わないでいいつてつておいて。あの子にはもつと大事なことがあるはずよ」

プレシアは視線を変えずに返してくる。

「娘が母親を思いやるのはもつと大事なことですよ！」

私がそう反発気味に答える。

「そんなことより勉強はちゃんと進んでいるの？」

それを聞いた私は持つていたものをガシャンと机に置いた。

「勉強ですか？進んでますとも！」

そしてプレシアに近づきデスクに手をダンツと置いた。

「魔力トレーニングも魔導物理も魔法知識も！シエンがここに来てからは実戦に近い模擬戦も行つて！フェイトは本当に一生懸命やつてますからね！」

デスクから手を離しながらさらに話を続ける。

「遊びたい盛り、甘えたい盛りの子供なのに。本当に…一生懸命に。あなたはそれを！『フェイトが一人前の魔導師になること』を望んでいて、それを叶えたらあなたに褒めてもらえると思っっているから！」

そして私は深呼吸をして、少し落ち着かせながら話す。

「私はやっぱりおかしいと思うんですよ。広いお屋敷とはいえ食事も一緒にとらない。会うことだって三日に一回あるかどうか」

「あの子を一人前の魔導師に育てるためよ。親への甘えが…あつたらいけないわ」

私はポケットに入れていた、一枚の紙を取り出しながら言った。

「意図も理由もわかりませんが、程度の話をしているんです。ついでに今日はこんなモノ

を見つけてましたよ。あの子の昔の作文です」

そういうとプレシアのがピクツと反応し、キーを打つ手を止めた。

「あなたがうんと優しくかったママだった頃の読んでて気持ちがあたっかくなる名文ですよ」

「…見せて頂戴」

プレシアは手を伸ばしたのではないとその紙を渡した。

「その作文、見たことは？」

「あるわ。…はじめて読んだ時は嬉しくてね。涙が止まらなかったわ」

気づくとプレシアの目に涙があった。

「あの子はこんなにも私を思ってくれてたんだなって」

プレシアは椅子に座り直す。

「ねえプレシア。今日や明日とはいいいませんから何か節目の日くらい、フェイトと一緒にいてあげてください。それくらいで甘えて勉強をおろそかになるほどフェイトは弱い子ではないんですから」

「考えておくれ。もういいから下がって」

「ダメです。約束してくれるまでここを動きません。なんなら研究の邪魔もしてあげますよっ」

「リニス！」

「…冗談です」

私は被っていた帽子を手に取り、胸に当てた。

「でも本当に…お願いしますよ、プレシア」

S I D E O U T

第03話 リニスとの別れ

SIDE シャクレイン 灼煉院 シエン 龍燕

リニスは行つてしまった。

俺は行くならフェイトに伝えてからでもと言つたが、リニスは首を横に振り伝えなかつた。理由は別れづらくなるからだそうだ。

フェイトはリニスが行つてしまつてから部屋に閉じ籠つてしまい、何日かが過ぎた今も出てくる気配はない。いくら声をかけても返事が戻らなかつた。

「今日も…フェイト出てこないね」

フェイトの使い魔のアルフが寂しい声で言った。食事もかなり減つてしまつたことも合わせ、フェイトのことをかなり心配していた。

「ああ」

アルフも俺と一緒にリニスが出て行く直前に会つていた。俺はその時リニスと約束した。『この世界にいる間、フェイトを必ず守る』と。

俺は椅子から立ち上がった。

「シエン？」

「フェイトの部屋に行ってくる」

そう言つて俺は食堂を出た。そしてまっすぐフェイトの部屋へ向かう。

「フェイト、聞こえるか？」

しかし、返事はなかった。

「そのままずっとそうしている気か？何もせずそのままじつとしていて、リニスが見たら何と言うか思い浮かべてみる」

それでもフェイトはだんまりだった。

「お前は何かしたいんだ？お前がしなければならぬ事はなんだ？閉じ籠つて出来る事なのか？自分でよく考えてみる」

そう言い残した俺は食堂に戻る。

食堂に入るとアルフはまだ座っていた。

「あ、シエン。フェイトは…どうだった？」

俺は静かに首を横に振った。

「そう…」

「言つてやりたいことは言った。あとはフェイト次第だ」

数時間後。フェイトは部屋から出てきた。そしてアルフや俺に微笑みを見せた。だがその微笑みは少し違った。どこか無理をしているような…そんな微笑みだった。

S I D E O U T

食事を終え、また久しぶりの修業の再開しようかという時だった。

プレシアに呼ばれ、フェイトと共に向かった。

「来たのね」

「何でしよう？」

「取って来て欲しい物があるの」

フェイトの前に空間モニターが浮かび、そこにジュエルシードと書かれたデータが映っていた。

「そのジュエルシードっていうのをたくさん取って来て欲しいの。どっかの誰かが輸送中に事故ってしまったみたいで：場所はあなたのデバイスに送っておいたわ。急いで準備を済ませて行きなさい！」

「はい。行つてきます」

フェイトはお辞儀をして部屋を出て行った。しかし、プレシアは何も言わずに立ち上がった。

「プレシア、フェイトが行くと言ったが？」

「……」

それでも何も言わず奥の部屋へ足を踏み出し始める。龍燕シエンはそんなプレシアの行動の見逃さなかった。プレシアの目の前に瞬動シュンドウを使って立ち塞がった。

「!!いつの間に?どきなさい!」

驚きながら言い放ってくるプレシアに、龍燕シエンは再度聞く。

「俺の質問にまだ答えてないが?」

「…それは必要ないからよ」

「必要がない?」

意味がわからなかった龍燕シエンは復唱する。

「さあ言ったわ。どきなさい!」

プレシアは強く言った。

「もう一つ、プレシアに聞きたい?」

「なにを?」

『『フェイト』の事だ』

「…私は忙しいn「人と少し違うな」!」

「あまり言いたくはないが…な」

「あなたまさか…」

プレシアは龍燕シエンを睨みつける。

「それにそこで眠っているのはフェイトの『素』モトになった者か？」

「……いつから」

殺気を飛ばし、プレシアは聞く。

「少し前だな。リニスの異変に気づき、それで突き止めた」

「…そう。それで？」

「プレシアはボロボロになってまであの子を蘇らそうと考えているのか？」

「ええそうよ。あの時の約束を果たすために」

「約束？だが無理してあの子が蘇ったとしても、プレシアが死ぬかもしれない」

「私が死んでもあの子に生き返って欲しい」

龍燕シエンは目を閉じて言った。

「あの子が生き返ったとして、プレシアが死んでしまったらあの子はどう思うか予想できないか？」

「そ、それは…」

プレシアは顔を歪めた。きつと蘇らす事ばかり考えてその先の事を考えていなかったのだらう。

「それにフェイトはどうなる？」

「……なさい」

プレシアは何かを言ったが龍燕シエンは続ける。

「フェイトの事も何も考えてないのか？」

「黙りなさい！」

途端プレシアは龍燕シエンに向け雷を落とすがそれを避ける。

「私の気持ちも知らないくせに何も言わないで頂戴！」

さらに雷を放って来た。しかし三つ目を放った直後にプレシアは咳込み始めた。

「プレシアー！」

慌て龍燕シエンはプレシアに駆け寄る。よく見ると手と口元に血が付いていた。

「私には…時間がないのよ……」

龍燕シエンはプレシアに手を向けた。

「癒し火」

龍燕シエンの掌シヨウから出た炎がプレシアを包み込む。

「これは？」

炎に包まれ苦しさが消えていき、プレシアはこの不思議な感覚に驚いた。

「自分の体の事も少しは考えろ。フェイトもあの子も心配する」

「私はあなたを殺そうとしたのに、あなたは私を助けるなんて…ね」

プレシアは小さく笑みを浮かべた。

「プレシアが死んでしまったらフェイト達が悲しむ。それに俺の…」
「何？」

プレシアは顔を上げ、龍^{シエン}燕の顔を見る。

「恩人でもある」

「恩人？」

「そうだ。ここに泊めてもらえなかったらどうなっていたかわからない」

「…そう。でも私はあなたを利用して…」

「それでもここにいさせてくれた」

「…そう。おかしな人ね。ありがとう、龍^{シエン}燕。前より楽になったみたい」

「よかった」

しかし、プレシアはいつもの顔に戻して言った。

「あなたもできたら、フェイトに付いて行ってあげて」

「ああわかった。プレシアも無理だけはしないように、な」

「…わかったわ」

そう言つて奥の部屋に消えた。

「さてフェイトのところに行くかな」

龍燕^{シエン}は部屋を出た。

フェイトの部屋に行くとアルフとともに準備していた。龍燕^{シエン}は準備といつてもすべて武己^{フキ}の収納機能に常時入れているため特に準備というのではない。

「よし、準備もできたし、行こか」

「うん」

「ああ」

フェイトは準備を終え外へ行き、ジュエルシードが散らばったという現地名『地球』に向かった。

第04話 拠点は必要不可欠

「ここにその『ジュエルシード』があるのか」

龍燕^{シエン}、フェイト、アルフの三人は見渡しのいい高いビルの上屋上に降り立った。

「うん」

龍燕^{シエン}は二人に振り向く。

「さて、拠点を造りに行くか」

「え？」

龍燕^{シエン}の一言にフェイトとアルフが驚く。その二人の反応に龍燕^{シエン}は首をかしげる。

「どうした？」

「ちやつちやと見付けて帰ればいいじゃん」

アルフが反論を言うが龍燕^{シエン}は龍燕^{シエン}でそれにさらに反論する。

「見付けられなかった場合、食事はどうするんだ？内容上、管理局の介入が何時始まるかわからない。管理局が現れてしまった時、アルフは『落ち着いて』『冷静』に食事出来るか？」

「うっ」

アルフは口を閉じる。

「じゃ、理解してくれたところで『仮拠点』を造りに行こう」

二人は頷いた。

——山

「人気もないし、認識障害や視覚障害など複数掛ければ問題無いな」

龍燕シエンは煉レンと暁アカツキを出した。

「景色良いね」

「眺めが良い」

するとフェイトが口を開いた。

「けどここ、小屋も無いよ?」

龍燕シエンは振り向いた。

「小屋より城さ。広い方がフェイトも修練できるだろう」

「城?」

龍燕シエンの言葉にフェイトは首を傾げる。隣のアルフも同じ感じた。

「ああ、城だ」

龍燕^{シエン}は近くにあつた廃墟を見つけた。

「こんな廃墟どうするんだい？」

アルフが聞いてきた。

「使うんだ。^{アカツキ} 暁」

「はい」

^{アカツキ} 暁は廃墟に手を翳した。

「はっ！」

すると微妙な高さを保つて、廃墟は浮いた。

「廃墟が浮いた?!」

アルフとフェイトはぼかんとしながら、ゆっくりと動き始めた廃墟を見ていた。今までは模擬戦の時にランサーを重力で圧気させて落としたり消したり、壁にして受け止めたり弾かせたりとしたのを見たただけだ。

「その辺りでいいぞ」

「はい」

^{アカツキ} 暁は廃墟を下ろした。

「んー、少し疲れたかな」

「ありがとう。重力系の消費は結構激しいからな、回復するまで武己《ブキ》で休んでろ」
「うん」

アカツキ
「暁は武己に入った。」

「し、龍燕。暁は何をしたの？」

アカツキ
「暁は重力慣性能力の応用を使ったんだ」

「応用…だったんだ」

フエイトは暁とよく模擬戦をやっていたが、その応用は見ていなかったなので驚いていた。

「煉のはまだ見ていなかったな。煉は物質変換能力を使える」

シエン
龍燕は煉に視線を向けた。

「煉。その廃墟内にあるものを物質変換して外に出してくれないか？」

小さく頷いた煉は廃墟に手を翳した。

「変わって」

そういうと廃墟内にあつた瓦礫等は一つに纏まり、外に出てきた。

「え、と…これが物質変換能力？」

「そうだ。まあ今のはただ纏めて出したただけだけとな」

フエイトは興味深そうに見ていた。

龍燕^{シエン}は華麗になった廃墟内に入り、見はじめた。

「中は…、下は丸出しになった基礎か。広い部屋と小さい部屋が廊下を挟んで一つずつ。広い出入口が一つか。煉^{レン}、早速だが床を造ってくれ」

「わかった」

龍燕^{シエン}は続いてフェイト達を見た。

「二人は周囲を調べて、魔力を持つ者がいないか調べてくれ。勿論、認識阻害等を掛けてな」

「わかった。けど、ジュエルシードは？」

アルフは龍燕^{シエン}に言う。

「基本は魔力を持つ者を探索。今回は最優先に。第二にジュエルシードを発見したら回収してくれ」

「うん。わかった」

フェイトも頷いた。

「魔力を持つ者を見つけても無駄な争いは避けて、情報収集のみになるべくしろ」

「うん。じゃ、行ってくるね」

「ああ」

フェイトとアルフは飛んで行った。

「さて、煉はどこまで進んだかな」

龍燕は廃墟内に入った。

「広い部屋は出来ているな。煉」

「はい」

「残りは？」

「廊下の半分と小さい部屋と出入口」

「そうかわかった。それが終わったら休んでいいよ」

煉は頷いて作業を再開した。

「さて、俺はアレの調整をするか」

龍燕は広い部屋で『アレ』の調整を始めた。

—夕方

「シエン、只今」

フェイトとアルフは戻り、廃墟の中に入って驚いていた。

「わっ、すごい」

「綺麗になってる」

瓦礫が一つも無くなり綺麗になっただけではなく、椅子やテーブルも置いてあった。

「シエン、この椅子とテーブルはどうしたんだい？新品みたいだけど」

「生成した。煉がな」

龍燕^{シエン}は煉^{レン}を見た。煉^{レン}は龍燕^{シエン}の後ろに隠れ、頬を赤く染めた。

「どう、かな？」

恥ずかしそうに言う煉^{レン}にアルフが凄^{レシ}いよと褒めた。

「あと、二人共来てほしい」

龍燕^{シエン}は扉の前に立った。

「どこに？」

「ジュエルシードを回収している時も鍛練を出来るように」

龍燕^{シエン}は扉を開けると地下に続く階段があった。

「階段？」

アルフが首を傾げた。フェイトも？を浮かべる。

「ついて来て」

「うん」

階段を下りると大型空間モニターを正面と、右側に二つのモニターを備えた司令室の

ようなところに出た。空間モニターの前に暁アカツキが座り、キーを叩いている。

「あ、龍燕シエン。フェイト、アルフもお帰り」

気づいた暁アカツキは言った。

「ただいま……て、ここは？」

「ジュエルシードを探すための仮施設のような感じに作ったの。今はまだ調整中で魔力反応のみだけど、そのジュエルシードつてのを一つ見つければメインモニターに出せるようになるよ」

フェイトとアルフは驚いていた。

「どこにそんな器材持っていたのさ？ほとんど手ぶらだったのに」

フェイトがそう言うのと龍燕シエンが両籠手リョウウゴテを見せながら言った。

「全部俺ブキの武己レンシウキヨウ『煉双暁』の収納機能にしまっていたのを出した。器材以外の材料なら大体は煉レンが生成出来る」

「何か凄いな」

「うん」

「あとフェイトとアルフの鍛練する場所だが、こつちだ」

龍燕シエンは下りてきた階段の隣の部屋を見た。その部屋には壁に何か装置の様なものがあり、床には一つ、大きな八角形の魔法陣があった。

「その部屋でやるの?」

「いや、その壁に掛かった装置の中でやるんだ」

二人は理解できていなかった。

「装置の中で? どうやって入るの?」

「八方陣の中に入って」

「うん」

二人は八方陣に入る。龍燕シエンと煉レンも中に入った。すると八方陣は輝き始め、光が周囲の景色を掻き消した。

「え?」

光が消えるとさっきまでの景色とは全く違い、装置の付いていた壁は門に変わった。

「……ここは? 移転?」

「でも魔力は感じなかった」

「ここは装置の中。そして——」

龍燕シエンは高さ扉の高さが約3m以上ある目の前の門を開けた。中は広い庭があり、更に奥には高く、大きい城が建っていた。

「ようこそ。特務機動隊隊舎、『マスラオ』へ」

「ます、らお?」

フエイトとアルフは驚愕していた。

「広い……」

「あそここの倍以上はあるよ」

龍燕シエンと煉レンは歩きだし、そのあとをフエイトとアルフが追う。

「シエン、ここは？」

「玄関口だ。履物ハキモノはここで脱いで手に持っていてくれ」

「靴脱ぐの？」

アルフは驚きの表情を見せた。フエイトも同じだった。これは『文化の違い』と言うものだろう。龍燕シエンも時の庭園で居候し始めた時、自分のいたところと違うと思ったところも多く感じていた。

四人は城の中を歩き始める。

「広い、ね」

真つすぐ伸びる廊下。扉も幾つかあったが通り過ぎて行く。そして渡り廊下を渡ると建物があつた。

「(ト)ト(ト)ト」

龍燕シエンは扉を開けながら言った。

「ここは第二多目的室だ」

中は外から見たこの建物の外見より遥かに広がった。

「どういう仕組みなの？」

アルフは疑問を浮かべ龍燕シエンに言う。

「この建物内は空間領域を広くしている。それに」

龍燕シエンは空間モニターを展開してキーを打った。

「空間設定をすれば」

周りの風景が荒廃都市に変わった。

「景色が変わった？」

「幻術？」

「完全再現型の立体映像だ」

「立体映像？」

「明日からここで鍛練を始める。昼間はジュエルシードの搜索と回収だから早朝と夕方頃になるな」

「うん」

そのあとは龍燕シエンはフェイトとアルフに空き部屋を案内し、また説明（時の庭園では寝

台だつたため敷布団の簡単な説明)。案内している間にアカツキ暁とレン煉が用意した夕食を食べた。

「はい」

「何？」

シエン龍燕は手拭いを二人に渡した。

アカツキ「暁達と先に風呂に入つて来るといい」

「ありがとう」

「さあ行こう！」

アカツキ暁がアカツキフェイトの手を握つた。

「うん」

四人は風呂へ行つた。

「さて俺は多目的に行つて、久しぶりに思いつきり鍛練するか」

シエン龍燕は第二多目的室に向かつた。

第05話 発見

「これがジュエルシードか」

龍燕シエンは森の中でジュエルシードの資料にあった、思念体と思うのを発見した。

■□□□——！

思念体は何かを叫んでいる。いや、吠えていると言うのか。

「さて、行くか。『体炎剛火』」

龍燕シエンは紅の炎に包まれる。体炎剛火タイエンゴウカは腕力強化の技だ。

そして思念体に近づいた。

「真炎流格闘術『固打』」

龍燕シエンの右甲は思念体に突き当たり、思念体は吹き飛んで木を二本薙ぎ倒した。

「…加減を間違えたか？それともこの思念体が弱すぎるだけか？」

思念体は砕け散り、ジュエルシードが露出した。龍燕は近づき、封印処理をしてみた。武己フキの封印処理術式で問題ないことを確認してから収納機能の中に入れた。

「まずは一つ目。今日はこれで切り上げるか」

龍燕シエンは拠点へ瞬間移動した。

——拠点

「龍燕シエン、お帰り」

暁アカツキが出迎えた。煉レンはここにいないようだった。

「ただいま。収穫あったぞ」

龍燕シエンは武己から封印処理を施したジュエルシードを取り出し、それを探査用機器に取り入れた。

「取り入れてみたが……どうだ？」

「順調に読み取ってる。結果は明日の朝か、昼くらいになると思う」

「わかった。俺はフェイト達を迎えに行ってくる」

「はい」

龍燕シエンはフェイト達を迎えに行こうと階段に足を着いた時だった。

「龍燕シエン！ 魔力反応あり。場所は……市街地！ 広範囲に広がってる」

龍燕シエンは振り向く。

「フェイトとアルフは？」

「反対側。距離的に捉えられたかわからない」

「そうか。俺が見に行く。ジュエルシードなら即回収する」

「了解！」

——市街地

「これは…何だ？」

市街地は木に飲み込まれていた。

「前に見た時はこんなではなかった。ジュエルシードはこんな危険な代物なの、ん」

龍燕シエンの上を誰かが飛んで行った。同時に結界が張られた。

「結界？フェイトか？…魔力が違う。管理局の魔導師か？」

龍燕シエンは通過した、白い少女にばれないように後を追った。

（しかし、どうするか。管理局とはまだ関わりたくない。いや、組織なら単独で出撃させるのか？いや、しないだろう。だとすると——）

「管理局とは別の可能性があるな」

龍燕シエンは白い少女を瞬動シユドワで追い越し、広範囲スキャンを木全体にした。

「ジュエルシードは…あそこか、ん？あれは」

球体の中にいる男女二人を見つけた。

「前に見たものと違う。人が飲み込まれたみたいだな」

龍燕シエンはジュエルシードに掌を向けた。

『眞炎流『燕風の火矢』』

火矢は真つすぐジュエルシードに当たり、力を抑えた。

武ツキ己キを使い封印処理した後、二人を救出し気絶させ、癒し火を掛けた。癒し火は傷を癒したりする技だ。

「よし、ん……」

背後から視線を感じた龍燕シエンは動きを止めて、警戒を始めた。

「あのう……」

龍燕シエンはゆっくりと振り向く。

「それを渡してくれませんか？とても危険なものなんです！」

白い少女は龍燕シエンに近づきながら言ってくる。

「俺の名は灼煉院龍燕シエン。君の名は？」

「高町なのはです」

「高町なのはか。危険なものと言うなら、渡すわけにはいかない」

龍燕シエンはなのはという少女から背を向ける。そこへなのはは龍燕シエンの背に向け、杖を向け

た。

「集める理由を教えてください」

「すまんが、教えられない」

龍燕シエン シュンドウは瞬動を使つて離脱した。

——特務機動隊隊舎『マスラオ』

「大丈夫？シエン」

皆で龍燕を出迎えた。

「大丈夫だ、問題ない。ジュエルシードは回収した。今日はこれで二つだ」

龍燕シエンはジュエルシードをフェイトの前に出した。フェイトはジュエルシードをバル

ディツシユに仕舞った。

「順調だね」

「ああ、だが白い少女にあった。名は高町なのと言っていた。その少女もジュエルシードを集めていた」

「その娘は管理局だったのかい？」

アルフが心配そうに聞く。

「いや、違うと思う。組織的な者なら、見習い程度の人を単独で任務をやるとは思えない」

「そうだね」

アカツキ
暁が納得する。

「だけど、そうなるとその白い少女つてのが管理局じゃないんなら一体なんで集めてる

んだい？」

アルフが疑問を言う。

「わからないが『ジュエルシードを集める』と言う目的が同じなら、その白い少女より早く集めなくてはならないということだ」

シエン
龍燕の言葉に皆が頷いた。

第06話 次元震

白い少女…高町なのはとフェイトが目の前で戦っている。アルフもフェレットと戦っている。が……。

「虎牙。何故お前がそこにいるんだ？」

「それは、俺が聞きたい」

他は戦っている中、龍燕と虎牙は向かい合うようにして話しをしていた。

虎牙は龍燕と同じ世界の出身で従兄弟、さらに龍燕の作った部隊の副官だ。

「これは……戦わないといけないのか？ 気まぐれぞ」

「気まぐれでも、な……。戦いづらい」

二人はかなり悩んだ。不審に思われぬように二人は距離を置いた。その時、衝撃が身体を襲った。

「何だ？」

振り向くと、ジュエルシードがフェイトと高町の魔力に反応したらしく暴走し始めていたようだった。

「あれは……危ない！」

龍燕は瞬動でフェイトの前に立ち、ジュエルシードに手を翳す。

「龍燕？」

「くっ…離れている」

「…うん」

フェイトが離れたのを確認した後、龍燕はジュエルシードに炎を纏わせた。

「真炎流『炎球壁』、術式装填技『爆炎』」

ジュエルシードは炎の丸い結界に包まれ、その内の一瞬結界内で爆発が起こり……暴走が止まった。

「あのー！」

なのはが龍燕に杖を向けた。同時に肢体が捕われる。

「今度は逃がしません。集める理由を教えてください！」

「仕方ないか……三分以内に俺を倒せたら理由を話す」

「わかりました」

龍燕は右手を拘束していた魔法を力で碎き、掴んだジュエルシードをフェイトへ投げた。フェイトはそれを受け取る。同時にフェイトから念話が来る。

『シエン？』

『それを持って先に行つててくれ』

『うん。気をつけてね』

フェイトとアルフは離脱した。

「いきます！・デイバイン…バスター！」

龍燕は左手の捕縛を振り解き、バスターを弾く。

「ツ！・シュート！」

なのはは三つの誘導弾を放つが、龍燕は左手だけで軽く弾き返していく。

「あと…一分半」

龍燕がそういうと激しくなった。直後、緑の輪が両手を拘束した。

「なのは！」

「ユーノ君。全力全開！・デイバイン…バスター！」

さつきよりも大きい砲撃が龍燕を覆い尽くした。

「これで！」

龍燕は魔力混じりの爆煙を吹き飛ばす。

「残念、終わりだ。また会おう」

龍燕は瞬動で移動した。

——特務機動隊隊舎『マスラオ』

「今帰った」

「シエン！大丈夫だった？」

フェイトが出迎えた。手には包帯が巻かれていた。

「俺よりフェイトが心配だ」

龍燕はフェイトの手に癒し火を掛けて傷を癒す。

「ありがとうシエン」

「ああ。もうそろそろ報告に帰った方がいいのかな」

「うん。明日の午後に」

「俺はもしものために待機しているよ」

「わかった」

翌日の昼、フェイトは翠屋という店のシークリームの入った箱を持って、アルフと一緒に時の庭園に戻った。

「煉、暁。何もなければ明日はジュエルシードが発動するまで休日にしよう」

二人は喜んだ。

「じゃあ龍燕、明日買い物に行こうよ！」

暁の言葉に煉は頷いた。

「そうだな。買い物に行こう」

明日の話しを終えた後、モニターを見ながらフェイト達の帰りを待つ。二人が戻ってきた時もう夕方だった。

「お帰り、フェイト、アルフ」

「ただいま。龍燕」

「うん、ただいま」

帰ってきた二人に元気が無かった。フェイトは夕食まで部屋にいとと言い、帰ってすぐ部屋に入ってしまった。心配になった龍燕はアルフに事情を聞くことにした。

「アルフ、なにかあったのか？」

「それが……」

アルフは事情を話した。途中から涙を流しながら言った。

「そんなことが……」

龍燕は握った拳に自然と力が入った。手からは血が滲み出していた。

「シ、シエン……血が……」

「俺の手よりフェイトの方が辛い」

二人はしばらく黙り込んでしまった。

「龍燕、何してるの？」

「煉」

気がつくとも後ろに煉がいた。

「血が出てる」

「いや…何でもない」

龍燕は癒し火で自分の手を治す。

「どうした？」

「夕食が出来たから呼びに来た」

「そうか。アルフ、行こう」

「あ、うん」

龍燕達は食堂に向かった。

次の日の早朝。龍燕、フェイト、アルフの三人は模擬戦をしていた。

アルフが前に出て龍燕と格闘戦をし、フェイトがアルフの支援。時折フェイトが入る、といった感じだ。

アルフも龍燕にはまだ一回も勝ったり、引き分けということはないが最初に比べ凄く上達した。

龍燕もそれをみて、眞炎流歩法術の一つ『縮地』を教え、今のところは練習中だがもう少して使えるようになると龍燕は思った。

「さて、早朝の鍛練は終わりだ」

「うん」

皆は食堂に行き、朝食を食べた。

「フェイト、アルフ。今日の午後は皆で出掛けようと思ってるんだが」

「お出かけ？ ジュエルシードは？」

「発動がないかぎり忘れて、今日は休日のように。どうだ？」

「でも……」

フェイトは不安そうな顔をした。

「たまには休む事も必要だ」

龍燕はアルフを見た。アルフも頷き返した。

「そうだよフェイト」

「アルフ……。うん」

「決まりだ」

朝食を食べ終えた後皆で準備を始めた。

「さ、行くか」

「うん」

「出発〜！」

暁は大きく上げ、出発した。

夜、公園のベンチに座って星を見上げた。

「綺麗…」

「これだけ綺麗だと羅暁国を思い出す」

空一面に広がる星を見て龍燕が呟いた。

「シエンのいた国も星が綺麗なの？」

「凄く綺麗だよ」

フエイトの問いに暁が答えた。

「そうなんだ」

その後も話しをしながら星を眺めた。

第07話 管理局

——海鳴近海公園

フェイトとなのはが海上で戦っていた。

その時、龍燕は気配を感じ取った。

「フェイト！その場からすぐに離れろ！」

龍燕の声にアルフとフェレットは振り返った。

フェイトとなのはがぶつかる寸前、その間に魔方陣が現れると、黒服の少年が現れ二人の武器を掴み取った。

「ストップだ！！時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ！武装を解除して詳しい話しを聞かせて貰おうか」

突然現れた管理局執務官という少年に、フェイトは振り払って下がった。その前に龍燕は虚空瞬動を使って駆けつける。

「フェイト、アルフ」

「龍燕！」

「逃がすか！ブレイズキャノン！」

クロノは龍燕に向けブレイズを飛ばした。

「眞炎流炎流技『炎壁』」

ブレイズは炎の壁に阻まれ消えた。

アルフも着き、龍燕は二人に触れ瞬間移動をしようとした時、フェイトの左腕にブレイズが命中した。

「痛ッ！」

「！フェイト」

「…フェイト、アルフ。先に戻ってくれ」

龍燕の言葉に二人は驚いた。

「何言ってるんだいシエン！」

「頼む」

フェイトとアルフの下に橙色の魔方陣が展開された。

「すぐに戻る」

「わかった」

フェイトとアルフは消え、魔方陣も消えた。

「時空管理局執務官と言ったか」

「貴様…公務執行妨害で逮捕する！」

クロノは杖を構え直し、龍燕を睨みつける。

「逮捕？無理だな」

「なんだと！」

「簡単に言えばまず、その時空管理局は管理外世界も公務が通用するのか？」

「ぐっ…」

クロノは辛そうな顔で口を閉じた。

「言えないか。ならさつき攻撃したことについて話しをここでしてもらおうか？」

「…犯罪者だからだ」

「そうか。なら今、管理外世界で公務をするならばその国の許可等が必要だろうか？執務官として判断を誤っている」

クロノは黙り込み、ただ龍燕を睨みつける。

「何を誤ったかわかるか？拘束ではなく攻撃してしまった事だ」

「お前は誰だ？流れ上、あの少女等と仲間なのか？」

「そうなるな」

「なら、君の言った通り話しをしてもらいたい」

龍燕は少し思考する。

「わかった。しかし、話しをする場所は決めさせていただきたい」

「何処だ？」

「俺の隊舎だ」

「なに？」

クロノは顔が険しくなる。

「話しただけだ」

「……」

クロノは黙り込む。

「わかった」

「そうか。まだ俺の名を言わなかったな。俺は眞羅暁帝王国陸総本部、特務機動隊課長、灼煉院龍燕。階級は特務帝将。今は分け合って彼女等と行動を共にしている」

龍燕は金属板のような札をクロノに投げた。クロノは受け取り、見る。

「なんだこれは」

「中央の水晶部を軽く擦れば隊舎の位置が出る。あと、攻めて来た場合は時空管理局は壊滅すると考えていたいただきたい」

クロノは一瞬震えた。

「安心しろ。攻めでなく、話しに來ただけなら俺は反撃はしない。明日、昼頃に來るとい

い」

龍燕はそう言い残すと瞬動で移動した。

—特務機動隊隊舎『マスラオ』

「ただいま」

「シエン」

フェイトが出迎えた。

「大丈夫だった？」

「大丈夫だ。ほら、埃一つとないだろう」

龍燕は両手を広げ、見せた。

「よかった」

「それよりフェイトは大丈夫か？」

「え？」

「腕に攻撃が当たったただろう？」

龍燕はフェイトの、包帯の巻いてある腕をみる。

「大丈夫だよ、このくらい」

「大丈夫ならいいんだが」

すると龍燕のお腹が鳴った。

「あっ」

「お腹空いたの？」

「みたいだな」

フェイトは微笑むと自身のお腹がなり、顔を赤らめた。

「フェイトも、だな」

「うん／＼／」

二人は食道へ向かった。

——高町宅

「虎牙君どうするの？」

「あの管理局という組織と関わらない方がいい。今日の話しは……あのリンデイという人の話しは立場等と言って俺達を駒として使おうとしていた」

「……でも」

「俺達が管理局の話しを拒否し、ジュエルシードの回収を続ければ捕まえに来るだろう」

な」

「ならー!」

なのは大きく口を開く。

「そうなれば管理局を潰すかな?」

にやりと笑って言う虎牙に、一瞬なのはと黙り混んでいたユーノが震えた。

「安心しろなのは、ユーノ。殺しはしないよ……皆、半殺しで勘弁してやるくらいだ」

「それ似たようなものだからね?!」

二人は虎牙へ息ピッタリにツツコミを入れた。

「むむッ。……そうか?」

「で、どうするの?」

「なのははどうする?自分を、手の内の駒にしようとしている組織に行くのか?」

なのはの問いに虎牙は問い返した。

「私、は……」

なのはは黙り込み、視線を下へ向けた。

「この話しはなのは次第だ。なのはの決めた方に俺も動こう」

悩むなのはを前に、虎牙はそう言って目を閉じた。

第08話 決意、そして会談

リンディと話した次の日。虎牙となのは、ユーノは再び話しをするため待ち合わせ場所と指名した海鳴近海公園へ向かっていた。

「虎牙君」

「決めたか？」

「私は…ジュエルシードを集める事は、リンディさん達と協力することに決めた」

「という事は、フェイトは別か」

なのはは頷いた。

「私、フェイトちゃんとお話ししたいもん。お話して…友達になりたい。だからフェイトちゃんの事だけはジュエルシードと別にしたい」

「そうか。なのはの言いたい事はわかった。きっと、友達にられるさ」

「うん」

なのはは大きく頷いた。

——特務機動隊隊舎：マスラオ

「龍燕」

フエイトが龍燕に声を掛けた。

「どうした？」

「管理局の人が来るんだよね？」

フエイトは不安そうに言う。

「ああ」

するとアルフが不機嫌そうな声を出した。

「攻めて来たたらどうするのさ？」

「攻めて来たら？そんなこと、解りきっている事だ」

「そんなことつて、なんなのさ？」

龍燕は拳を握り、二人の見える位置にあげる。

「攻めて来たら……攻め返すのみ」

アルフとフエイトがピクツと身体を震わせた。

「あつちにはすでに『攻めて来たたら管理局を潰す』と警告しといたからな。当然だ」

「え……と？冗談、だよな？」

ひきずった顔でフェイトが龍燕に聞く。

「いや、本気だ。警告までして攻めて来たら、やるぞ?」

真面目な顔で言う龍燕に、二人は苦笑し始めた。

「攻めて来ない事を祈ろうよ?」

「まあ、俺も攻めて来てほしくはない。正直無駄に疲れるしな。さて、少し早いが昼食の

準備をしよう」

「うん」

フェイトはまだ心配そうな顔をしていた。

「皆で握り飯でも握るか」

「ニギリメシ?」

アルフとフェイトは首を傾げた。

「軽く塩の入ったご飯を三角に握るんだ。中に具を詰めても美味しい。フェイト達で言う

サンドイッチに近い食べ物かな」

「そうなんだ」

「具を入れると美味しいんでしょ?なら肉入れようよ!肉肉ッ!」

アルフは口から涎を垂らしながら踊る様に喜んだ。

二人はアルフを見て微笑した。

そして約束の時間になった。

1200時。リンディ提督はクロノ執務官と十二名の部下を連れて指定の位置に降りた。

「あの家かしら」

「多分そうですね。他には何もありません」

クロノ執務官が先頭に立ち、家の扉を叩いた。

扉は開かれ、少女が顔を出した。

「はい」

「時空管理局、クロノ・ハラオウン執務官だ」

「はい。お待ちしていました。どうぞお入り下さい」

リンディ提督達が中へ入る。

「灼煉院龍燕は何処に？」

クロノが真剣な顔で少女に言う。が少女は無視してリンディ提督の方を見る。

「私は龍燕の武己、煉双暁の煉です。主龍燕は今城でお待ちです。どうぞこちらへ」

煉は奥の部屋へ歩き出す。クロノは不機嫌な顔でその後を追った。

リンディ提督達は地下の部屋に案内された。

「この部屋は？」

案内されたこの部屋は特に何も無い部屋だが床に何か魔法陣にも似た絵が描かれている。

「少しお待ち下さい」

煉は奥の壁に手を置いた。すると壁は真ん中で縦に裂け、左右に向かって消えるともう一つ、奥の部屋が現れ、その中央には城の飾りが硝子の中に飾られていた。

「何だ？この部屋は」

クロノの顔が険しくなった。

「皆様。この羅暁式八方魔方陣の中へお入り下さい」

局員達はざわめいたがリンディ提督は頷いて魔方陣内に入ったため、クロノ執務官と局員達も中へ入った。

「では」

魔方陣は光り始め、皆を包み込んだ。

光りが収まり、巨門が目の前に現れ、局員達は驚いていた。

「なんだ？この扉は」

「俺の城、特務機動隊の城の表門だ」

龍燕は軽々と門を開け、皆を入れた。

「ようこそ。特務機動隊隊舎、『マスラオ』へ」

龍燕は皆を客間に案内した。客間は二つを使い分けた。

一つは護衛で来た局員達。もう一つは話しをする龍燕とリンディ提督以下、クロノ執務官と補佐のエイミイだ。

後から入って来た煉が皆に粗茶を配り終え、話しが始まった。

また、管理局側には秘密で別の間にいるフェイト達に聞こえるように音声を送りながらの話した。

交渉話しは約二時間程続いて終わった。結果は当然、決裂に終わった。

龍燕が言ったのは『ジュエルシードの回収の許可』だ。しかし、当然の事その答えは『許可は出せない』だ。

だが龍燕も諦めず、『ここは管理局という管理外世界であるから捜査も何もかも駄目なものだろう』という答えに『君達が集めているジュエルシードは危険度の高いロストロギアだから』と返され、話しは完全に平行線、決裂した。

次に話したのは龍燕についてだった。その話しの結果として出たのは次元漂流者と

いう答えだった。

話しが一通り終えたあと、リンデイ提督は龍燕に質問する。

「龍燕さんは何故テストタロツサ家に手を貸すんですか？」

その問いに龍燕は「それは…」と間をあけてから答えた。

「助けたかったからだ」

リンデイ提督は首を傾げた。

「帰り道のわからなかった俺を助けてくれた。だから俺が自分の世界への帰り道がわかる日まで、助けてあげたいと思った。テストタロツサ家への恩返しともいうかな」

「そうですか」

それで会談は終わり、管理局は母艦へ戻って行った。

「龍燕」

「どうした、フエイト」

「これからどうするの？」

フエイトは不安で堪らなそうな顔をしていた。

「そうだな。まず、このままジュエルシードを回収しよう。そしてまたも管理局が邪魔

をしてきたら、軌道上に待機している母艦の近くを攻撃し、いつでも沈められると最終警告を出そう。さらに艦隊が来てしまった時はその本拠地へ単身攻め入り恐怖を刻ませる」

「マジか？」

アルフが震えながらフェイトの後ろに下がり、それを見た龍燕は笑いながら冗談だと返す。

「最終的にはフェイトが決めてくれ」

「え？」

「もしフェイトが俺に『それ』を頼んだら行こう。まあ、無いと思うがな」

フェイトはくすくすと笑った。

「うん。私はそんなこと言わないよ」

アルフや煉達も笑い始めた。

第09話 決戦

龍燕は管理局側をお願いをした。内容は『フェイトとなのはのジュエルシードを賭けた戦い』だ。

結果は少し長くなったが了解してくれた。多分管理局側にいると思われる虎牙となのはも同様のお願いしたのでだろう。

そして今はフェイトに色々と『戦い』を教えている。フェイトは覚えが速く、龍燕はきつと勝てるだろうと考えている程だ。

「フェイト、とうとう明日だな」

「うん」

「大丈夫だよ。フェイトなら絶対に勝てるさ」

アルフは言った。

「そうだな」

龍燕は笑った。

「明日の戦いで、まず一段落だな」

「うん」

フェイトは頷いた。

「身体、休めろよ」

「うん」

早朝。龍燕とフェイト、アルフは指定された場所に着いた。なのは達もいた。

五分遅れて管理局執務官、クロノが現れた。

「揃ったな。じゃあ始めるぞ」

「周りに被害がでないよう結界を張らしてもらおう」

龍燕は千変結界を、海上を中心に掛けた。

「君は本当にめちやくちやな……」

クロノが龍燕の強力過ぎる結界を見て驚きを通り越して呆れていた。

「始めの合図はクロノ執務官が頼む」

「わかった」

フェイトとなのはが海上で合図を待った。

「開始」

試合が始まった。

なのはの魔力弾の誘導は前より優れていた。フェイトはその対策を龍燕に教わり、問題なく防いでいく。しかし、後半戦に入ると魔力の消耗、体力の消耗も上がり、動きのキレが段々と低くなってきた。

と、その時フェイトはなのはを捕らえた。

フェイト最大の切り札。初めて龍燕に使った時は全く効かなかった。そして、龍燕に对なのはの戦の為にその切り札を更に強力発展した切り札。

その切り札の技、全てをなのはに当てた。しかしなのはは全てを受けきって見せ、さらに技を用意していた。フェイトは避けようとしたがバインドを掛けられた。

「受けてみてー！ディバインバスターのバリエーション！」

なのはの前に大きな桃色の球が現れた。

「あれは何処から現れた？なのはは尽きかけてたんじゃないのか？」

龍燕は疑問に思い虎牙に聞いた。

「あれはなのはの切り札、『スターライトブレイカー』だ。辺りに散布された残留魔力を収束した技らしい。俺もあれに撃たれた時防ぎ切れず落ちた」

「落ちた？お前がか」

龍燕は予想以上のののを見て、まずいなと感じた。

「全力全開！」

なのは杖を振り落とした。それを見てフェイトは最後の抵抗にとシールドをいくつも張った。

「スターライトツ……ブレイカーー!!」

スターライトブレイカーはフェイトの張ったシールドを消し進み、フェイトを包み込んだ。

戦闘終了と見た龍燕は虚空瞬動を使い、海面に落ちる前に受け止めた。

「フェイト…、決したな」

「……うん」

「フェイト、勝負は…負けてしまったが、よく頑張った」

「……うん」

『プットアウト』

バルディツシユからジュエルシールドが出てきた。それを取りに出たなのはがフラフラで飛び寄ってきた。その時、フェイトの上に紫色の雲が現れた。

「フェイトを頼む！」

そう言った龍燕はフェイトをなのはへ投げた。その直後に紫色の雲から落ちてきた雷をまともに龍燕は受け、海に落ちた。

「龍燕！」

フェイトは身体を震わせ、なのはの腕から飛び降りて龍燕を追った。無防備となったジュエルシードの一部はプレシアにより移転された。

虎牙は龍燕とフェイトを引き上げ、安全のところへ移動した。

「龍燕！大丈夫か？」

「虎牙、か？身体が少し痺れているが。フェイトは？」

龍燕の手を見てやると痙攣していた。

「アースラにいる」

「そうか」

龍燕もアースラに向かった。リンデイ提督に会った時、丁度そこに通信が入った。潜入したアースラの部隊のようだったが皆倒れていた。

そして、次に映されたのは……。

『消えなさい！私の娘、アリシアにはさわらせない！』

映されたのはプレシアと…、カプセルで眠るフェイトと瓜二つの少女だった。

「アリ、シア……？」

フェイトは口を半開きになっている。

『聞いているんでしょう？フェイト……』

フェイトは身体を震わせた。

『貴方はこの子、アリシアの代わりに作り出した人形……』

「プレシアが作り出した死者の蘇生秘術……当時研究がなされていたプロジェクト『F・A・T・E』のことだな。それにあやかっ、フェイトにその名をつけたか」

『その声、龍燕ね？』

「……ああ」

龍燕は頷き、プレシアを見た。

『アリシアは……いつでも私に優しく……。フェイト、やっぱりあなたはアリシアの偽物よ……。せつかくあげたアリシアの記憶もあなたじゃダメだった……』

「やめて……やめてよ!!」

『アリシアを蘇らせるまでの間に私が慰みに使うだけのお人形』

そこでプレシアさんは言葉を止めた。何かを思い止めた顔を手で隠した。

「プレシア……、もう話すな」

「龍燕、その目……」

虎牙が龍燕の目を見ながら言う。龍燕は炎之瞳という技を使い、プレシアを見てい

た。

そこで映像は途絶えた。フェイトはシヨクな言葉を聞き、正気を失っていた。リンデイ提督に一室を借りて、フェイトを寝台に寝かした。

「フェイト」

目は開いているがフェイトは反応がなかった。それでも龍燕は言った。

「これを預けておく」

龍燕は右に付けた籠手を外した。

「煉」

外した籠手から少女が現れた。

「はい」

「俺が戻るまでフェイトを、護ってくれ」

煉は頷いた。

龍燕は部屋から出ていき、リンデイ提督を捜した。

第10話 最終決戦、と……

龍燕達は今、クロノ達と話しをしていた。

「潜入なんだが」

「俺は行くぞ」

「俺もだ」

龍燕と虎牙は聞き行くと言うところクロノは頷いた。

「頼む」

「あの……」

なのはは口を開き、真剣な顔で言った。

「私も行きます！」

「なのは？」

虎牙は驚いた顔でなのはを見た。

「危険だぞ」

「それでも！」

真剣な顔でクロノや虎牙に言い返すなのは。

「わかった、俺から離れるなよ」

「お、おい」

虎牙の言葉にクロノが目を見開いた。

「こうなったら止められない」

クロノはなのはと虎牙を交互に見て溜め息をついた。

「全く：好きにしろ。艦長には僕から言っておく。突入隊の編成は僕と龍燕、虎牙、なのはでいいな」

皆は頷いた。

「二時間後に突入するから、それまで休んでいてくれ」

簡単な作戦会議を終え、龍燕と虎牙は特務機動隊制服を着用した。

「その服装は？」

「眞羅暁帝王国、特務機動隊の制服だ」

「もしかして虎牙もか？」

「すまん。龍燕は課長で、俺は補佐だ」

クロノは苗字が同じだった事を今更思い出した。

「そうだったか…」

龍燕は一室を借りて虎牙と話した。

「虎牙」

「どうしたんだ？」

「俺、アリシアを蘇生しようと考えてる」

虎牙は顔が険しくなった。

「蘇生は……」

「禁術なのはわかる。分かってはいるが……」

龍燕は悩んだ。

「龍燕がしたいならやればいいだろ」

「……」

「禁術は確かに悪い事、だが良いことに使うならきつと龍神様だって龍王様だって許してもらえるさ」

「……虎牙。ありがとう」

突入する時間が近づき、龍燕と虎牙、なのははクロノのいる転送ポートに移動した。同時に次元震と思う揺れが船を襲った。

「早く行こう、クロノ」

「ああ」

転送ポートからプレシアのいる時の庭園に移転した。

時の庭園は変わり果てていた。廊下のあちこちは抜け落ち、黒い空間が覗かせていた。

「ここは虚数空間。あらゆる魔法が一切発動しなくなる空間だ。落ちたら重力の底まで落下する。二度と上がってはこれないから気をつけろ」

クロノが走りながら説明した。

「精神力を使う俺や虎牙でも心配だな。気をつけよう」

虎牙は頷いた。

長い廊下を駆け、広間に着くと沢山の傀儡兵が待っていた。

「俺と虎牙で片付ける。クロノとなのは力は力を温存している」

二人は頷いた。

龍燕と虎牙は虚空瞬動を使い一分程で傀儡兵全てを蹴散らした。

「なんて速さと力だ」

「どうって事はない。次はどうするんだ？」

「二手に別れる。虎牙は僕について来てくれ。なのはは龍燕と一緒にプレシアの方へ」

「わかった」

「了解」

二手にわかれた。

次の広間にも傀儡兵は沢山いた。

「龍燕君、私も行くよ」

「わかった」

大型の傀儡兵になのははダイバインシューターを撃つたが全く通用しなかった。

「くっ」

なのはは次にダイバインバスターを放つがシールドが固く、届いていなかった。

その時、その傀儡兵に雷が落ちた。見上げると龍燕の籠手を付けたフェイトがいた。

「なのは……」

「フェイトちゃん」

なのははフェイトの近くへ寄った。

「あれ、シールドが固いよ。でも、二人でなら」

フェイトは無言で頷き、二人は大型の傀儡兵に攻撃した。二人の攻撃は見事にシールドを破り、本体を貫いた。

「そっちは終わった、か…フェイト？」

「龍燕、私も行くよ。母さんに言いたいことがあるから」

龍燕は笑って答えた。

「わかった。行こうフェイト、なのは」

三人はプレシアのもとに向かった。

S I D E プレシア・テストロッサ

「……………侵入者？執務官達かしら。でも私は構ってあげられない」

この不治の病に侵された身体……………、もう駄目ね……………。

(フェイト……………あなたは、幸せに生きなさい。いつでも見守っているわ)

そう心に思い、目を閉じた。

次元震の揺れが治まり始めるのを感じて周りを見回した。

「プレシア・テストロッサ」

そこにいるのは緑色の髪に、管理局員の服装をした女……………来たわね。

「終わりですよ。次元震は、私が抑えています。駆動路は直に封印……………あなたの元には執務官が向かっています。……………忘れられし都アルハザード……………そしてそこに眠る秘術は存在するかどうか曖昧なただの伝説です」

「……………夢物語でも構わない。滅び行く身体に与えられた最後の希望……………それを邪魔する

人間は全て消し去るわ！」

ただのハツタリ。私にはもう、立っているのも精一杯。もう限界だわ……。

「……随分と効率の悪い賭けだわ」

「そんなこと知れている。でもやらなければいけない。こんなはずじゃなかった、この過去をやり直す！」

私が消えることで、あの子が幸せになれるのなら……。

近くの壁が破壊された。

(執務官かし、！)

崩れる瓦礫から入って来たのは執務官ではなく、龍燕だった。

「……龍燕」

「周りに認識障害等を張った」

「何しに来たの？」

龍燕は私に近づき、アリシアを見つめた。

「蘇生しに来た、と言う前に二つ質問する」

「蘇生出来るの？」

「執務官が来ると厄介な事になり、間違ひなく止められるだろう。質問に答えてくれ」

私は質問に答える事にした。

「その質問は？」

「アリシアは間違いなく『事故による死』なんだな？」

「そうよ」

「そうか。『寿命による死』でなければ禁術が通用する」

「二つ目の質問は？」

龍燕はアリシアを見て頷いた。

「もう一つは元の身体があるのだが、大丈夫だな」

龍燕は私に、アリシアをポットから出すように言いい、服も着させるように言う。

「これでいい？」

龍燕は頷き、儀式を始めようとした。が龍燕の壊したところとは別の壁が爆発した。

「くっ、遅かったか」

龍燕の顔が険しくなった。

「龍燕…そこで何をしているんだ？」

「龍燕は悪くないわ！」

私は残った魔力を使って九つのジュエルシードを発動させた。

「プレシア…」

「龍燕…ここは危険だから離れげふっほっ…っうう」

私は手で咳を受け止めた。手には赤い…血溜まりがあつた。

(私はもう……)

「母さん！」

私のもう一人の娘、フェイトが歩いて来た。

「母さん、助けに来ました」

私は…酷くショックを受けた。私はフェイトに酷いことを続けてきた。それなのにフェイトは…私を笑いながら『助けに来ました』と言つてきた。

涙が零れそうな目を私は必死に堪えた。

「虎牙…いるか！」

龍燕の声に虎牙がクロノの隣をすれ違って下りてきた。

「ああ。すまん、わざと遠回りしたんだがクロノも結構優秀だった」

龍燕はコソツと虎牙に言うとかかを手渡した。

『『これ』があれば管理局は無茶な事は出来ないだろう。あとフェイトに煉を預けたから隊舎のことを聞いてくれ。そこなら安全だろう』

虎牙は頷いた。

「龍燕…、あなたは何故私を助けるの？」

私はとても気になった。何故こんな私を助けるのかと。

「人が人を助けるのに御大層な理由や理屈を並びたてる必要はない。ただ助けたい。放つてはおけない。人を助ける理由はただそれだけの想いがあればいいんだ。俺はプレシア達を放つておけない。プレシアが死んでしまったらフェイトも、アリシアも悲しむ。それに……俺にも娘が二人いるんだ。もし娘が死んでしまうような事があつたら、その時俺はどうなるか……。でも、それでも娘を助けるために俺も禁忌を犯すかもしれない」

私は涙を堪え切れずに涙が溢れで出た。

その時、次元震が激しく揺れ始め、床にはあちこちに亀裂が走った。

「あ……」

私とアリシアは虚数空間に出されてしまった。

「母さん！」

「……フェイト」

私は虎牙に助けられた。フェイトは白い魔導師に。アリシアは？

アリシアの方を見ると龍燕が必死にアリシアを助けようとしていた。

「龍燕！」

私は叫んだ。龍燕はアリシアの手を捕らえ、虚数空間の中で振り返って言うてきた。

「プレシア！約束だ！アリシアと一緒に戻ってくる！虎牙、お前の癒し火でプレシアの

病気を治してくれ！」

「龍燕！」

龍燕はもう……虚数空間の中。助かる可能性もゼロに等しい。私のせいでこんな事になってしまった。私がジュエルシードをお願いしな……けれ……ば。

私の視界はここで真っ白になった。

第11話 星と月に願いを込めて

シエン
龍燕とアリシアが虚数空間コスウクウカンに消えて三日、虎牙は龍燕に言われた通りフェイトとプレシアを隊舎に連れてきた。

管理局からは何度もフェイトとプレシアの引き渡しを要求してきた。虎牙コガはその度に

『龍燕が戻るまで待て』と追い返した。

「私は……このままでいいのかな？」

・ フェイトは心配になっていた。

・ 「ん……」

虎牙は悩んだ。

「交渉を……してみるか？」

「交渉？」

「ああ。だが、軽くても一月か二月程の保護観察がつく可能性とかがあると思うが……」

「虎牙、それでも……」

真剣な顔でフェイトは虎牙に言った。

虎牙は短くそうかと返しながら笑う。

「え？」

「お前を見てるとなのはを思い出す」

「なのはに？」

「それになんか、龍燕も思い出すな」

「え？龍燕も?!」

意外だったのかフェイトは驚いた。

「明日、リンディ提督に会ってくる」

フェイトは頷いた。

次の日、虎牙は時空航行船アースラの艦長に会うため、通信で呼びかけ、アースラ内で話しに行った。

虎牙はアースラ艦長のリンディ提督、クロノ執務官らと一室で話しを始めた。

虎牙の突き出した要求は『テストロッサの犯罪を全て帳消しにし、自由にする事』だ。

当然、クロノはその要求に激怒した。しかし、虎牙は突入最後に龍燕からもらった記録を突き出すと黙り込んでしまう。

二人に突き出した記録はプレシア・テスタロッサが犯罪を犯してしまったそのきっかけが入ったものだ。

当時プレシアは管理局に勤めていた。その時魔導炉の製作に着手し、管理局の上からの命令で未完成で不安定さが残る魔導炉の起動を無理に攻められ、その起動後の事故で愛娘のアリシアが死亡してしまった事。

「時空管理局のある世界でも情報機関はあるのだろうか？もし、この情報を公開したらどうなる？」

虎牙は強い口調で二人に言った。

「僕達を、管理局を脅す気か」

「事実だ。だが君達が俺の条件を飲むならば公開はしない」

二人は暫く黙り込んでしまった。

そして、リンディ提督は口を開いた。

「…わかりました。その要求を飲みましょう」

「母S、艦長！」

クロノは立ち上がった。

「執務官、この事を公にされれば管理局はおしまいです。管理局が犯罪人になってしま
う素をつくつてしまつた、と」

クロノは静かに座り直した。

管理局と話しを終えた虎牙は特務機動隊の城、マスラオに帰還した。

同時に不安にもなつた。龍燕が帰る前に勝手に話しを集結させてよかつたのかと。
龍燕は虎牙にプレシアの記録の入つたのを渡した。

「お帰りなさい。虎牙」

「ただいま」

プレシアが迎えた。

「ごめんなさいね。私がずっと過去に囚われていたから」

「いや、いいんだ。龍燕が決めて、俺が今代わりにやつてる事だ」

そういうと居間に移動した。

「この世界内ならなんとかなると思うが。龍燕は今何処にいるんだ」

虎牙は呟く。

「虎牙」

振り向くとフェイトがいた。

「どうしたんだ、フェイト」

「ええと、模擬戦の相手をしてもらえない、かな？」

「模擬戦の？ いいよ、わかった」

虎牙は立ち上がり、フェイトと多目的訓練場に向かった。

第2章 九天の書

第01話 目覚めた場所

龍燕は目を覚ました。しかし、落ちてからどのくらいの時間が経ったのかはわからない。

「ここは……、アリシアは！」

見回すとアリシアは手元にいた。龍燕はすぐに禁術である蘇生術の呪文を唱え始める。

「聖なる光りよ、散りし魂に今再び命の火を燈せ」

アリシアの体を龍燕の掌から出た紅の炎が包み込む。そしてその炎がアリシアの胸の上を集まり、溶け込んだ。

「術式終了……」

いつの間にか額に出た汗を龍燕は拭い、それからアリシアを見つめた。

「う……うん」

「アリシア！」

「…お兄ちゃん、だれ？」

目を覚ましたアリシアは首をかしげながら言った。

「俺は灼煉院龍燕だ」

「シエン…お兄ちゃん？お母さんは何処？…わあ!？」

起き上がるうとしたアリシアはバランスを崩し、顔から倒れそうになったのを龍燕が支えた。

「大丈夫か？」

「…うん、でも…動きにくい」

蘇生したばかりだからか身体が追いついていないようだった。それを知らないアリシアは頭に？を浮かばせていた。

「俺は、プレシアに君を届ける事が任務だ」

「お母さんに？ここは何処なの？」

「すまん。目が覚めたら既にここだった。多分遺跡の中だと思うが」

周囲は人工の石造りの空間。見た感じが遺跡かなと思うほどに古かった。

「遺跡？…あれは？」

アリシアは何かを見つけ、指を指した。そこには本が一冊あった。

「本…みたいだな？」

その本は鎖で止められて、祭壇のようなところに置かれていた。

そこに近づくとその本は光り始め、宙に浮いた。

「何が起こったんだ？」

「あれ浮いてるよ？本が浮いてるよ?!」

アリシアは混乱していた。

『起動します』

本は機械音を鳴らした。

『我が主の名を教えてください』

「主？」

『はい』

「……灼煉院龍燕だ」

『認証終了……』

本を縛っていた鎖が弾け飛び、頁がめくられた。

『これより一番、起動します』

一頁が開き、文字が埋められると光りの球が現れた。

『末永く、よろしくお願ひします。我が主』

光りの球は人型となった。

「お前の名は？」

「まだ私も、本もありません」

「そうか……本の名は九天^{クテン}、お前の名は神威^{カマイ}でいいかな？」

「神威。ありがとうございます」

光りを放つていた人型は光りが治まり、30cm程の少女に変わった。

「九天の書、機能……正常。改めて、末永く宜しく願います、主龍燕^{アルシ}」

後ろで見ていたアリシアはきよとんとした表情で見っていた。

「姿が小さいな」

龍燕は神威の姿を見て言う。

「主に負担を掛けないために消費を最低限に抑えた姿です」

「そうか。消費する力は精神力か？」

「はい」

神威は頷いた。

「ところで、ここは何処だかわからないか？」

「少しお待ち下さい……この遺跡の名はわかりませんでした、近くに都市があるようです」

都市？と言った感じにアリシアは首を傾げる。

「転移可能範囲ですが、行きますか?」

「転移出来るのか?」

「はい。私が起動したと同時に基本的な機能は使えます。一ヶ月から二ヶ月程で『空間転移』が使用可能になると思われれます」

「空間転移?」

「はい。空間転移は異界へ転移する技です。しかしあまりに広範囲な転移となると使用する精神力も増え、充填までに時間が掛かります。また充填は一定量ずつしか溜まりません」

「ああ、わかった」

そのあと、アリシアと少し話してから先程神威が見つけた都市の近くへ転移した。都市に転移して見られた際に面倒なことが起こるかもしれないためその近くへ転移したのだ。

「結構広い都市だが発展はあまりしてないみたいだな」

龍燕は都市に入り、最初に声出した感想だった。

辺りを見ると屋台があちらこちらに開かれ、活気に満ち溢れているかと思えば、喧嘩を賭け事になっている輩（ヤカラ）もいる。

「都市より町、とかに見えるな」

龍燕は悩んだ。町に着いたがお金がない。お金がなければ最低でも食事ができない。……等と考えているとある話しが耳に止まった。

「とうとう来たな」

「ああ、今回こそ勝つぜ」

「ダメダメ、魔法を使う奴にや勝てねえよ」

「大丈夫だ。魔法なら日々鍛練を続けてるから何とかなるさ。賞金は頂きだ」

賞金？

龍燕は会話をしていたその二人組に声を掛ける。

「少し、話しいいか？」

「ああん？なんだお前は」

「賞金がどうか言っていたが」

「んん？ああ大会の事か？」

「その大会に出るにはどうすればいい？」

二人は爆笑し始めた。

「馬鹿言っちゃ駄目だな。大会は歳に制限はないがお前なんかじゃ一回戦落ちだろう

よ」

「……なら出れる資格があるか試してくれるか？」

「試し?」

二人組は首を傾げた。

「ここでもあるかはわからないが、『腕相撲』はどうだ?」

「腕相撲か。まあ俺にや勝てねえと思うがな」

男は龍燕を嘲笑った。そしてもう一人の男が道のど真ん中に、店から借りたテーブルを置いたことでなんだなんだと人が集まって来た。

「今からこいつを試すんだ!」

龍燕の相手をする男が集まった人達に叫んだ。周りにいた人達は凄く盛り上がった。

「龍燕お兄ちゃん。大丈夫なの?」

アリシアは心配そうな顔で龍燕に言う。そんなアリシアの頭を龍燕は撫でる。

「大丈夫だ。少し待っててな」

アリシアは頷いた。

「さて盛り上がったところで始めようか」

男はご機嫌に言った。

「ああ」

男と龍燕はテーブルに着き、手を取り合う。

「さてお互いにいいな?……始め!」

決着は一瞬だった。

「な……え？」

男の手の甲が一瞬でテーブルに着き、盛り上がっていた周りが一気に静まり返った。

「お……、おめえ……一体何もんだ？」

「龍燕だ。灼煉院龍燕」

「シエン、か」

周りにいた人達は皆バラバラに散って行く。

「そうか」

龍燕は男から出場方法を教わり、会場へと向かった。

受付をどうにか済ませ、前金を手に入れた。

「お金は一様入ったな」

ただ……、通貨の価値観があまりわからなかった。前金で貰ったのは千ドラクマだった。わかるのは硬貨一枚で一ドラクマと言う辺りだった。

「何か食べるか？」

「うん。お腹ペコペコだよ」

念のためこのドラクマは使わない事にした。話しによれば、大会開始後は無料で部屋の貸し出しや食事も出来るそうだ。

大会までは三日。三日くらいなら武己に入っている食料で余裕に過ごせる。また、大会で得た賞金を旅で必要なものに回せば何とかなる。

「とりあえず一旦町から離れよう」

「うん」

アリシアは頷くと龍燕の手を握った。

第02話 Dブロック予選第1試合

大会当日。受付に行くと言選の準備が行われた。

本選に出場するにはアルファベットの数だけあるブロックで勝ち進む必要があった。その後、決勝に進むらしい。

まあとにかく勝ち進めばよいということだ。

「ねえ龍燕お兄ちゃん」

「ん？どうしたんだ？」

「この大会、勝てるの？周りを見ても強そうなのが沢山いるよ」

周りを見れば熟練者と思われる人達。

「(そうだな。切り札はいくつか残さないと) 大丈夫だ。勝てる。『勝たないと帰れないんだ』と思いつながら行けば勝てるさ」

まだ心配そうな顔を浮かべているアリシアの頭にぼんと手を置く。

「心配するな。俺は必ず勝つ。約束しよう。俺はアリシアを護り、お前の母上のところへ無事に届ける」

「ほんと?」

「ああ」

「わかった、信じる」

アリシアは笑顔で言った。

武己から暁を出して試合中アリシアの護衛に付かせた。

暁や煉を初めて見た時アリシアは凄く驚いていたが、すぐに打ち解け仲良くなった。

そして、予選が始まった。

予選の相手は大柄で筋肉質な大男が二人だった。龍燕は一人。席は空いているが、いなかったため空席となっている。

「なんだあ?予選はただの準備運動になっちまいそうだな」

「そのようだ。俺は後ろで見てよう」

「わかった」

大男と龍燕は距離をおいて向かいあった。

「悪いなあ、相手が悪くて。おめえは予選落ちのようだな」

大男は嘲笑い始めた。龍燕は無視して腕を組んだ。

(さて、どう戦うか)

龍燕は能力無しで戦おうと考えた。

「では、Dブロック予選第1試合。東方は新人拳闘士、一名。対する西方はベテラン拳闘士二名。始めて下さい」

審判をする男が言った。

「さて、痛くないように一撃で倒してやるからな」

笑みを浮かべた大男は龍燕に近づき拳を繰り出し、龍燕の顔面に当てるが微動だにしなかつた

「ん?」

妙に感じた大男は拳を引いて驚愕した。龍燕は拳をまともに当たりながら平然と何もなかつたかの様に腕を組んでいたからだ。

「何故何とも無いんだ?!くっ…」

大男は再び拳を放つ。しかし、龍燕は左手で軽く弾き、瞬時に相手の懐へ入り込み、空いた右手で大男の腹部に固打を入れた。

「ゴッ?グッ……」

大男の巨体が床から少し宙に浮き上がる。龍燕は引いていた右脚を左脚に揃える。

「『円掌……』」

龍燕の両掌が大男の腹部を捉えた。

「……突破トッパ」！

両掌を突き出し、同時に右足に力を加えながら一步踏み出す。吹き飛ばされた大男はもう一人の仲間を巻き添えに壁を貫通して行った。

「……力を込めすぎたか」

審判は大男へ歩み寄って気絶している事を確認。

「しよ勝者、灼煉院龍燕選手」と叫び、予選突破は楽に終えた。

無事余裕に第一試合を勝利に終えた龍燕は借りた部屋へ戻った。部屋には食事の仕度が整っていた。

「わあ豪華だね。……でも食べ切れるかな？」

大きなテーブルに乗る約十人前の料理にアリシアは驚いた。

「ん？少ない方だと思いが」

「……え？」

龍燕のさりげない言葉にアリシアは振り返った。十人前の料理は、龍燕にとっては少ない方だと考えているがアリシアから見れば驚きの他ない。

食事を始めて一時間。アリシアと暁はとくに食事を終えていた。続いて龍燕も料理を食べ終えた、ように見えたが……。

「お代わりお願いします」

お代わりを頼み、空の皿と入れ代わって行く。

最終的に食べ終えたのは食べ始めて約二時間半後だった。食べた量にすれば約三十人前はいったかも知れない量だった。

「龍燕お兄ちゃん、いっぱい食べるんだね」

「ああ、今日は少し動いたからな」

龍燕は満足そうに言った。

「あ、そうだ」

龍燕はアリシアの隣に座った。

「アリシアにまだ言っただけでなかった事がある」

「え、なに？」

龍燕はやや真剣な顔で言う。

「アリシア、お前には妹がいる」

「いもう、とっ？」

アリシアは考え込む。

「ああ。アリシアが眠っている間にできた妹だ。名前はフェイトという」

「フェイトかあ。私に妹が出来たんだ」

アリシアは疑う事もなく、喜び始めた。

「フェイトの動画を見るか？」

「あるの？」

アリシアは目をキラキラさせた。

「模擬戦中にくいつか録ったものだ。あとアリシア。フェイトの見た目は年上に見えるが実際は妹だから間違えないように」

「年上に見えるってどういう意味なの？」

アリシアは不思議そうに首を傾げながら龍燕に聞く。

「アリシアは少し長く眠ってたんだ。まあ見ればわかる」

二人の前に空間モニターを展開させ、龍燕の前に小型のモニターを操作して映し始めた。

モニター画面に映る、龍燕と模擬戦するフェイトをジッと見つめるアリシア。

「……本当に、というより私に凄く似てる。それに強いね」

「ああ、アリシアにそっくりだ」

龍燕とアリシアはモニターに映る模擬戦を観戦した。

「なんだか、未来の自分を見てる感じで……不思議」
アリシアは『早く会ってお話ししたいなあ』とワクワクとしながら呟いた。

第03話 Dブロック予選決勝試合

試合は一試合目を終えた次の日から一日二試合というペースで進んだ。

予選は能力無しでも余裕な戦いで今のところ勝ち進んでいた。しかし、次の予選決勝の相手で情報が入った。相手は英雄の一人らしいのだ。

「英雄か。能力を使わんとだめか」

予選決勝前の試合は、相手は普通だという様に魔法を使って来た。しかし、威力もそこまで無く、速さもないが英雄とまでいう人だから強いんだろう。

「相手の力次第で決めよう」

龍燕はそう決めた。

アリシアにいつも通り暁を護衛につかして予選決勝の場へ向かった。

予選決勝の場へ踏み込むと剣を持った男と仮面を付けた人がいた。

『とうとう来ました、Dブロック予選決勝試合！』

アナウンサーが会場内に流れた。

『西方はここまで目立つ魔法を使わず勝ち上がって来た新人拳闘士、灼煉院龍燕選手。』

二人組で戦う試合で唯一一人で勝ち進めるといふ拳闘士です」

『東方は紅き翼の一人、ベテランをも越えた英雄拳闘士のジャック・ラカン選手！』
すると会場内に喚声が上がった。

『では！Dブロック予選決勝試合！始めて下さい！！』

龍燕はゆつくりと歩き、近づいた。対するラカンは跳ね上がり、空中で構えた。

「ラカン、適当に右パンチ！」

強烈なパンチが龍燕をたたき付け、そこを中心に砂埃が高々と上がった。

「安心しろ。寸止めだ」

親指を立てて決め台詞を言うように言った。

「新人相手にちとやり過ぎたか」

ラカンはそういうが、声を出して笑うその顔に本当に思っているのかと疑うものは多
いだろう。

砂埃が晴れると、地面には巨大な拳の形に凹んでいた。しかし、龍燕の姿がそこには
なかった。

「いない？（……まさか跡形も無く潰しちまったか？）」

背中に冷や汗が流れ、徐々に焦り始めるラカン。

途端、ラカンの背後に龍燕が現れた。

「お前と似た感じに行くぞ。……シエン、超適当に右烈掌ー！」

龍燕は本来一点集中して繰り出す烈掌を文字通り適当に、集中無しで放った。

英雄ラカンは吹き飛び、先程凹んだ地面に更に大きく深く深く手の掌の形に減り込んだ。それを見たもう一人の仮面の男はあっさり墜ちたラカンを見て慌てた。

「(ラカン殿をこうもあっさり……強い、いや強過ぎる……)」

するとラカンがスウと立ち上がった。

「……ハハ……ハハハ……」

ラカンは笑い始めた。

「ハハハハハッ——ハッ……」

気の狂った様な笑いが辺りに響くと、糸が切れたように静まる。すると龍燕は一瞬にして何かの力に当てられた。

「この力は……魔力、か？」

龍燕の視界からラカンが消えると背中に衝撃を受け、地面にたたき付けられた。

「なんだ今のは」

龍燕は立ち上がると続き、ラカンが急接近し、拳を繰り出してきた。

「(っ、強い……)」

龍燕はラカンの攻撃を全て受け流し、距離をとった。

「さすが、英雄と言われるだけあって強いな」

「ハッ！その攻撃を一撃目以外全てを受け流すおめえもすげえよ」

距離を取った龍燕は動きを止める。

「これからは『力』を使わせて貰う」

「やっぱりな」

ラカンはニヤリと笑った。

「隠してんだろ？出しな。出し惜しみすんじゃねえよ。思いつ切り来な」

「ああ。改めて、行くぞ」

龍燕は瞬動でラカンの背後に周り、固打を繰り返すがラカンはそこにカウンター、左肘を突き出した——が虚空を突いた。

「！、グッ……」

龍燕の掌打はラカンの右腹を捉えていた。

「眞炎流掌技奥義之貳『震鉄・烈掌』！」

「ガハッ?!」

ラカンは吹き飛び、周りを覆う魔法防壁を貫通し、壁に減り込んだ。

砂埃が立つ壁からはラカンは立って来なかった。気配は感じたので気絶したようだった。

「次は……」

龍燕は仮面の人を見ると手を振り、「……………辞退します」と負けの宣言をした。

『か、かか勝ちましたア——！英雄ジャック・ラカンに新人拳闘士、灼煉院龍燕選手圧勝オ！本選進出決て——いッ!!』

アナウンサーは勝利した龍燕にインタビューを始めた。

「まずお名前から改めてお願いします！」

「龍燕。灼煉院龍燕だ」

「龍燕選手はこの大会で優勝して賞金を手に入れたら何に使われるんですか？」

「賞金を手に入れたら旅費にする予定だ」

「旅費ですか。期待が高まります」

アナウンサーは大きな声でいい、観客も凄く喚声が湧いた。

予選決勝戦が終わり、龍燕はアリシア達と合流した。

「龍燕お兄ちゃんつてすつごく強いんだね」

さっきのラカンの戦いを見ていたアリシアが興奮しながら話しを掛けてきた。

「まだ完全には出してないがな」

「え？本気じゃないの？」

アリシアは驚いた顔で聞く。

「まだ相手はいるんだ。ここで本気を出したら後が危なくなる」

「ふーん。そんなんだ。ねえ龍燕お兄ちゃんって本気出したらどのくらい強い？」

「そうだな……」

龍燕は考える。例える相手がいない。いてもアリシアは知らないだろう。なら、出来ることになる。

「星は潰せるな。軽く」

「星は潰せるってどういう意味なの？」

難しかったのか顔に？を浮かべるアリシア。

「……簡単に言えば、星を壊す事ができる……かな？まあしないがな」

「そんな事が出来るの!？」

跳びはねそうなくらいアリシアは驚いた。

その後、龍燕は受付に行き今後の流れを教わり、部屋へと戻ると夕食を食べた。量はいつもより多かった。

「ええと、明日は会場の準備で休みと言っていたな」

龍燕は頭を掻いた。

「アリシア」

ソファーで暁と話しているアリシアを呼んだ。

「なあに？」

「明日は休みだから遊びに行かないか？」

パーとアリシアの顔に笑顔に染まった。

「うん！」